

報



會

會 岳 山 本 日

37

月 七 年 九 和 昭

ウエストン氏と嘉門治老との
思ひ出

辻 莊 一

殆んど六七ヶ月前、山岳會の書宿諸家が殆んど総動員の形で、主として日本山岳會創立當時の思ひ出をかつたことがあつた。そしてこれがつきつかけになつて書宿の候補者たちがわれわれとと思ひ出ばなしをかつたことがあつた。その時自分はある特殊の立場においてこの現像を是認する氣持にはなれなかつた。と云ふのは一般に思ひ出が語られる時にはすでに事が沈滞してゐることを證明することである。若き生活者は思ひ出をかつた餘裕をもたぬ。たゞ古きもののみが思ひ出に活きる。故にかく思ひ出が多くかつたられることは登山界の沈滞を示すと考へたからである。しかし沈滞はつねに前途の發展を豫言する。沈滞期に浮びあがつて來る歴史的意識は轉形期の兆候である。故に思ひ出が語られることは即ち新らしき飛躍への準備であつて、沈滞そのものではない。かく考へることによつて思ひ出は積極的意義をもつに至る。幸にして我々の世界は沈滞のまゝに終ることなく、新しい飛躍のためにボーイズしつゝあることが明瞭に看取せられる。従つて過日の思ひ出には積極的意義があつたと考へられる。

くことは自分が今こゝに書きつけやうとする思ひ出に、積極的價值を與へる前提ではない。自分の思ひ出は單なる思ひ出である。フロイドによれば、人間は過去の勞苦を忘れ、その樂しさを記憶することによつてその生活を樂しきものにするものである。過去と云ふ領域にはめられた繪は暗いかげを残すことなく、すべてが薔薇色に輝いてゐる。この美しき色が前途に反映するが故に、我々はたのしく生きてゐる。自分の思ひ出はかゝる一種のカタルシス以上の意味は毫ももつてゐないのである。もしどなたかこの文をよんで下さるならば、この自分の心がまへを理解しておいてのことにしていただきたいと思ふので、こゝに書きつけたい次第である。

明治四十二年と云へば日本の登山界の一の黄金時代であつた。日本山岳會は屢々講演會等をひらき、或は各地の有志の請に應じて講演者を派遣することが多かつた。そして各地に大小の登山のための會が結成せられたのであつた。その頃自分は中學の三年か四年の生徒であつた。けれどもどうしたはずみか、登山熱にとりつかれて、親爺をだまして小島氏の「日本アルプス」を買つて非常な熱心でこれを文字通り讀破したあげく、仲間を二人糾合して初山旅に出た先きは、云はずと知れた神河内である。その旅行の準備等に關して今から思ふと極めて滑稽なことが多かつたがそれは省いて置く。ともかくリュックをしょつた人は先づ無いと云ふやうなことから見ても、大體の想像がつく。

松本の宿屋を早朝に出て、町はずれから岡太郎馬車にのり、ほこりだらけの道をひるまでかゝつて烏々につく。そこで中食もそこ／＼に人夫を雇つて烏々谷にわけ入つた。そこにはトロもなく、わづかに人が一人通れるだけの道があるにすぎなかつた。従つて自分たちは十分に期待を満足させながら、大きな桂の木の下にせぐさる留の無人の小屋についたのが、三時と四時との間であつたらうか。

するとそこに笑顏の老爺が居る。そのおやぢとどう云ふきつかけで話をはじめたかすつかり忘れたが、結局こちらから、それではあなたが嘉門治さんですかと云ふやうなことになる、穂高の話をきいたり、明神池に行つたら自分の小屋によつて、そこに釣竿があるからそれをつかつて良いと云ふことをきいた覚えがある。そしてその頃やうやくひらけかけた神河内に來る人は多くなつたがおまへさんたちが一等若いと云つておだてられたことも覚えてゐる。そして彼は下手へ、自分らは徳本峠へとわかれたのである。

神河内の温泉へついたので谷のひともし頃であつた。あしたは穂高へと云ふわけで早寝をして翌朝五時ごろ支度をして温泉の前に立つて勢揃ひをした。一行は一高の二部の學生

目 次

ウエストン氏と嘉門治老

との思ひ出 辻 莊 一

山の諸雜誌に對して 高橋 健治

南島に於るコバの方言その他 高橋文太郎

研究欄 山岳撮影と赤外線フィルム 額田 敏

の新製 八月の圖書室 額田 敏

會務報告 額田 敏

新刊紹介 リュックサック 第七號

立教大學山岳部々報 第六號 逸見 眞雄

三高山岳部報告 第十一號 角田 吉夫

逸見 眞雄

が三人、それにその連中が「海軍」と假りに名づけたやせぎすの、その頃としては珍らしい紙靴をはき、太短かいストッキングをつき、リュックをしょつた、麻製の服を着た仁であつた。この仁がどうも田部重治氏ではないかと思つてゐるが、元來人の質

を覺えることにかけては全然無能な自分のことであるから全くあてにならぬ。そしてその學生の一人がスリツプしたり、「海軍」が高い處へ來ると奇妙な聲をあげて怒鳴るのにあきたりして、前穂高に上り、宿にかへつたのが五時頃であつた。

その次の日である。今日は明神池へ行くこと云ふのでまた五時頃から眼をさまして、昨日穂高へ登つたうれしさも手傳つて、かなり騒ぎたてたやうである。すると奥の方の部屋からこちらへ人の來る氣配がして、妙なアタセメントで、あまり朝早くからさわいでくれるな、ことに婦人はねられなくて困るからと云ふ意味を障子の外から申入れた人がある。自分らは一言なくなつて、急にしづまりかへり、下にをりて煙のそばで朝飯をすまして、田代池に行き、また明神池に行つて、さんゝ遊んだ。そのかへり道である。徳本下の牛小舎の近くまで來た時、向ふから西洋人夫婦が嘉門治をつれてやつてくる。行會さまに嘉門治と挨拶した。それが自然と西洋人夫妻にも行きわたつて、話がはじまつた。そしてそのとたん、今朝おこりに來たのはこの人だなど覺つたけれども、もう今更あやまれるものではない。結局こちらの旅行の計畫などを片言の英語まじりにはなした。そして大いにおだてられた揚句、私はウェストンです。東京へ來たら山岳會に入りなさいと云つたことを覺えてゐる。そして我

々は河童橋の方へ、氏は槍へと別れた。その時今でもおぼえてゐることは、夫人が麻裏のズツク製の靴をはいて居られたことである。そして途中で、我々もあんな靴がほしいなあと度々話したものである。その後ウェストン氏とも嘉門治老とも會ふ機會がなくなつてしまつたのである。

山の諸雜誌に對して

高橋 健治

あるが、自分の初山旅の追憶と共につねにこの二人の梯がおぼろげながらも生き／＼と眼の前に立つのである。けれどウェストン氏にしかたれた人はあまりなからうと思ふまゝに編輯者の一人の望に應じて書きつけておく。(昭和九・六・一五)

茲に私は以上の題目の元に筆を持つたが、それは山の諸雜誌に對しての色々の希望と云ふよりも寧ろ山の諸雜誌を通じて、それに執筆する人々及讀者、全體としては吾々から成り立つ登山者社會について最近目立つておかしう思はれる節々を列舉し延いて吾々登山者社會として、これ等雜誌を如何に利用し、又これに依つて如何に吾々登山者社會を導いて行くべきかといふ事等に對する愚見を一寸述べてみた。山の雜誌が雨後のタケノコの如く街頭に表はれ出したのは此處二三年の事であるが、始めの中には中々意氣込んで眞面目であつた。それ以前に存在した「山岳」や學校山岳部の報告を一般化するに結構であつたが、二三年の中に種が切れて來たのか、紙上で人物月旦の様なもの表れだして來た。黨派心を勝手に作つて何々派と名付けてみて、お互ひに穴の拾ひ合ひをやつたり、言葉の端をとらえて議論し合つ

たり、甚だしきは勝手な想像をし、間違つた事を堂々と曝露して喜んだり、ひどいものになるとブライベートの事も世間に公開して讀者の刺激や話題を増したり、友人と知人と見知らぬ人との區別もなく一様に論じたり振舞つたり、不愉快なことが續發する様に思ふ。自信を以つて物を言ふと同時に責任と謙遜を忘れない様にした。何々氏を論ずるか、何々派の人々とか云ふのは、趣味でない職業社會では通づるかもしれないが吾々美しい自然と相手の爐邊の集ひには餘りにも神経過敏な、下品なことではあるまいか。登山者社會はもつと悠々と樂しくありたいものである。山の雲をながめて歌を唱ふ様にほがらかでありたい。反駁論をたゞきつたり、自己宣傳と評してみたり、何々技術、何々主義とはどんなものかと、登山に何もそんな六ヶ敷しい理屈もないのに、いやに物事を窮屈に考へるのは山を愛する吾

々の社會では止めた方がいい物である。餘りにも廣芥にまみれた競争臭で一杯だ。山の雜誌は巷間の講談俱樂部や婦人公論でなく、山の自然を畫いたもの、山の研究、叙述的なもの、探求的なもの、等山の眞實、最善、美しさに充實したものにしてほしい。これは専ら編輯に責があるのではなく、寧ろ井戸端會議的な記事を好む讀者、それを書く筆者の向上を望むべきであらう。

こんな記事のために人格を傷付けられた人々が何人あつたことであらう。少しでも勇氣のない人又は功利的な人は、たとへその人がいゝ山の指導者であつても、やがて「趣味のために山に登つてゐるのに、そんなにやましく兎や角云はれるなら止めて了はう。美しい吾々の山がけがれる」と云つて引込むで了ふであらう。そして巧みに言辭を操つて、一見甚だ謙遜な様に見せて所謂世渡り上手が好評されて、實力あるものを吾々が登山者社會から失ふといふ場合が非常に多いと思ふ。吾々は吾々の指導者を養はねばならない。自分が會員でありながら會の不滿を口にして、山岳會が日本山岳界を指導せぬ等泣言云つてもそれは聞き捨てすべきである。各山の雜誌は日本山岳會を助ける義務があり、登山者社會は指導者を養成すべきであらう。急増した山の雜誌は競争もはげしい事ではあるが、山や山の人々の社會をきづつけない様心掛けたいものである。ジャーナリズムを善用すると否とはその人々の品性延いてはそれらの人々の形成する社會の特性如何に依るのであり、山の様な結構なものを對象とする登山團體は美しく山の様であり、それらの内容である山の雜誌には巷間の小競り合ひや、人を相手にしてジャーナリズムを悪用し他人の人格をきづつける様なことはなくしたい。第一人者とか、世界の權威とか云ふ言葉を輕々しくもてあそばさず、大空に聳ゆる高根を望む靜かな不二の心で吾々山岳人は溫和に社會を結び雜誌を讀みたいものである。

靜かな不二の心を以つて決して私は孤立的環境から來る睡眠狀態を意味するものではない。山の諸雜誌を圍んで不斷の創造的活動能力を見出すべき刺激を必要とする。情勢的な安易で慣習の名の下に濃潤たる登山を忘れることは出来ない。常に更新せねばならない。それこそ山の變化であり精神であると思ふ。

社會が墮落に向ふと常に色々面倒な法規や議論が起つて、その靜止沈滞を意味するものであるが、常に新鮮な能動的な山の吾々の社會では山の精神に満ちた爐談に時を過ごしたいものである。

八月の圖書室

例年の通り、八月の中の本會圖書室開室日は左の如く變更します。

月水金 午後五時—九時
火木土 休 室

南島に於るコバの方言その他

高橋文太郎

既に會報誌上でコバの方言については若干の報告が發表されて居る。

殊に廣島縣地方に於ての該方言は、磯貝氏が明確な御報告を一々實地探訪に據つて得られたものを寄せられて居る。此度私達は薩南十島(九州本土と奄美大島との間に點在する諸島で、現在は鹿兒島縣大島郡十島村に屬す)の島々を探訪する機會を得て、幾つかの島に上陸の上、種々その民俗に接する事が出来た。この折採集したものの中、コバに關する方言に就き報告さして頂き、興味を持たれる方々の御參考に致し度いと思ふ。

一、山に自生して居る竹等を伐り倒して置いて之が乾燥した時に野焼をなし、後に其處をヤマクワ(山銀)で打つて根掘りをする。斯うして山に畑を拓いて行くことをアケルと云ひ又はコバウチと云ふ。この畑には麥、粟、蕎麥、甘藷を作る(硫黃島、昭和九年五月十四日採集)。

二、島には檳榔が自生して居るが之をピローと呼び、この樹の梢に生じた新芽又は新葉をコバと云ふ(硫黃島同日十五日)。

三、ピロー(檳榔)の新芽をコバと云ふ。荷物運搬具の背負梯子に取付ける輪型の背中當を此のコバから作つて居る(口之島、同月十五日)。

四、山を焼いて畑を拓くことを、ハタケをキル又はハタケをナグと云ふ。此の焼畑作業をコバとは殆ど云はぬといふ。畑には甘藷、水瓜等も作り耕作出来る期間は永い。

又、ピロー(檳榔)の新芽をコバと云ふ(中之島、同日)。

五、山を焼いて拓いた畑をコバと呼ぶ。麥、甘藷、甘藷などを繰返し作る。(寶島、十六日)。

六、檳榔の新葉で作つた草履を見る。コバで作つたと云つて居た。(平島、同日)。

七、檳榔の芽生えを單にコトと呼ぶ。この木の成長して大きくなつたををピローと呼び、此葉から糞を作り又小なるもの例へば若木をコバと云ひ此葉から笠など作る。(小寶島、同日)。

八、檳榔の木の小さいのをコバ、大きく成長したのをピローと云ふ。(寶島、同日)。

九、檳榔の木の小さいのをコバ、此葉より笠など作り、大きく成長したものを全體もコバと云ふが此の新葉を特にコバと呼び之より糞を拵へる(奄美大島、宇檢村字檢、十八日)。

十、北村力馬氏「奄美大島語案内」には、びんらう、コバ、檳榔、と記さる。

以上に記した通り、特に十島村の島々に於ては、新芽、新葉のコバと木全體のピローとの呼名をはつきり區別して居るのは注意に價する。それから、焼畑をコバと云ふのが案外に妙い點である。此の旅行の歸途、吾々は島根縣の隠岐列島を訪ねたので、其後採集したものを二三左に附記する。

一、アラアケ。山林を伐り焼畑を作るのを斯う云ふ。先づ蕎麥を作り菜種など作る。二、三年使ふと作物は出来ないから杉苗を植ゑる。(隠岐島、道後、周吉郡中村大字中村、昭和九年五月廿六日)。

二、ウネツタイ、トコ(分水嶺)トコ、ミネ山頂)ラーゼ(側枝)イゴ(側枝と側枝との間の窪み)タキ(急な崖)ワド(三方が塞がり一方が明いた洞型の地形の處)ランド(海岸のホラ穴)タボ、タンボ(海底に於るU字型の窪處)(同島、道前、知夫郡浦郷村、廿四日)。

三、ラゼ(分水嶺)ムネ(山頂)(道後、周吉郡中村)尙、周吉、隠岐兩郡の境には床山超えと呼ぶ峠がある。前記、山頂や分水嶺をトコと呼ぶ語がある以上、この床山超えのトコも分水嶺を意味するトコと關係があるらしく面白いと思ふ。(昭九・六・七)。

研究欄

山岳撮影と

赤外線フィルムの新製

額田 敏

山岳の寫眞撮影に赤外線を利用することは最近漸次試みられることが増加して來てゐる様であるが、今迄標準型活動寫眞フィルムを使用する外は、全々、乾板を使用してゐたのであつた。

乾板必ずしも大なる不便は感じはしなかつたが、最近、ロールフィルム並びにフィルムバックで赤外線寫眞用の「サクラ、赤外フィルム」が、而も我が小西の六樓社から製造發賣せられる機運に到つた事は、日本の寫眞界、特に素人の寫眞家にとつて、非常に喜ばしく且つ愉快に感ずるものである。感光劑の大きさもロールフィルムはベスト判から、バックは、アトム判より製作せられてゐるが爲めに、カメラを使用する者はあらゆる階級に亘りて、赤外線撮影が出来ることになつた。

六樓社のお先棒となつて太鼓を叩く様であるが、實際に試験して、その性能の大略を茲に記述することは同好の志に對して、敢て小西の廣告ではあるまいと信ずるが故に、次に試験の結果を述べる次第である。筆者の使用せるものは、發賣外の試製品(市場に於て公賣することには對してであり、その性能範圍は既にある方面に於て盛んに利用されつゝあるものなり)製品番號U—一九六一ダースなり。

其の説明には、六樓社製赤外線フィルムを使用し、一般風景に對してF/4.5のレンズを用ひ1/50秒を標準とすることを記せるが、筆者は其の六樓社製品赤外線フィルムを有せず、ラッテンF、88、70、8等を有するが故に之に對する性能を試みたのであつた。

六樓社 赤外線フィルムバック七五〇 商標番號U—一九六 昭和六年七月一日午後三時及三日午前十一時晴 鏡玉 テツサーF/4.5開放 被寫體 一般景色(建造を含む) フィルター ラッテンF 88 アグフ露出時間 A 1/100 1/30 1/25 1/10 1/5 1/100 同 B 同 C 同

此の結果を見るにA—Iは露出過度、B—Iは先づ過度(多少過度の氣持) C—Iは稍々不足、 A—II過度、 B—Iは先づ過度、 A—III先づ過度、 此事より考ふるに、 C—Iとして、1/25秒を與ふるも相當の感度はあるらしく考へらる。之

は讀者の試験の結果を待つものである。

而し赤外線七五〇フィルムの特性上フィルムとしては、フィルムが亦滲出部分に最高感度を有するが故に、ラッテン、A、F程度を以て最も効果的であると考へられるのである。

故に、先づ、フィルムはラッテンA、F級のものを用ひ、山岳撮影に對して晴天下 $\frac{1}{50}$ — $\frac{1}{100}$ 秒を標準として撮影すれば過なきものと考へらるる現像は、指定處方として、メトール・ハイドロキノン現像薬、及びメトール細砂現像液を示せるが、筆者の體質上メトール使用を非常に忌むが故に、試験撮影の現像はアミドル現像液を使用した。

現像の際は同一液中にて三—四枚のフィルムを連續的に現像すれば、遂にフィルムに漸點を生ずる業の傾向があるが故に、成るべく、現像液はフィルム一枚毎に新しきものを用ふるを宜とするが如し、イーストマン・アキストリ・ムレットセンシティブプレートの如く、現像おしの爲めに陰畫の硬調化は餘程緩和されてゐる様であり、如上の超感光速度を有するが故に、今後、赤外線寫眞なるが爲めに、三脚を必要とすることは殆んど不要となれるものと云つて宜しい。(七月五日記)

會務報告

六月定例理事會報告

六月十四日午後七時本會事務所にて、

出席者

小島、木暮、鳥山、松方、茨木、神谷、額田、三田、逸見、黒田、

一、山日記編輯報告(松方)

一、山岳第二十九年第一號發行第二號編輯報告(黒田)

一、三十週年記念の件(鳥山)

一、會計報告(神谷)

左の通り新に交付した、舊會員章第一四八八號は無効となつた。

會員章番號一五二五(舊一四八八) 東京市小石川區大塚窪町二九 齊藤成三男

會員計報

東京市前幹事、評議員 高田達也氏 (大正七年十一月入會、會員章番號六四六)

昭和九年六月十七日逝去せらる、本會は茲に謹而哀悼の意を表す。

退會者

昭和九年六月 後藤 弘之 (一三九) 岐阜縣

代表者變更

東京市神田區駿河臺 明治大學山岳部代表者 未 光績

新着圖書

上高地及其附近山岳に於ける醫學的研究 東京醫學山岳會登山醫學研究所 額田敏著 赤外線寫眞 梓 書房

東京附近山の旅 朋 文 堂 立教大學山岳部々報 第六號 三高山岳部報告 第十一號 サヌツクサツク 第七號

早稲田大學山岳部 山小屋二九、三〇 朋 文 堂 野鳥 第三號 梓 書房

山 第七號 梓 書房 ケルン 七月號 朋 文 堂

登山とスキー 同 黎 閉 社 國際觀光 同 國際觀光協會

甲山峽水 六月號 山梨縣景勝地協會 地學雜誌 六月號 東京地學協會

ツーリスト 七月號 ジャパン・ツーリスト・ビューロー

岳 樺 第十六號 日本銀行山岳會 山嶽 第八號 大和山岳會

南嶺 第三輯 南 嶺 會 石川體育 第八號 石川縣體育協會

黒木立 九二—二一 關東岳愛會 ベルグ 七月號 岡山々々岳會

燕 同 服部時計店登仙會 旅行 同 東京旅行クラブ

旅路 同 關東旅行クラブ

旅 同 東京アルカウ會

山 旅 同 神戸山旅クラブ

山 幸 同 阪神山岳會

山 彦 同 東京山彦山岳會

山 旅 同 横濱山岳會

山 旅 同 八王子山岳會

山 旅 同 山と溪の會

山 旅 同 東京山旅クラブ

山 旅 同 大阪管見社

山 旅 同 日本アルカウ會

山 旅 同 東京登渉溪流會報

山 旅 同 東京登渉溪流會報

山 旅 同 東京登渉溪流會報

山 旅 同 東京登渉溪流會報

山 旅 同 東京登渉溪流會報

山 旅 同 東京登渉溪流會報

山 旅 同 東京登渉溪流會報

山 旅 同 東京登渉溪流會報

地質調査所報告 (昭和七年度)

The Geographical Journal Vol.

LXXXIII No. 5-6 May June 1934

Trail and Timberline No. 188 June 1934

1934

The Prairie Club Bulletin No. 237 June 1934

June 1934

Sierra Club Bulletin Vol. XIX No. 2 Apr-May 1934

The Mountaineer Vol. XXVI No. 7 June 1934

Appalachian Mountain Club Bulletin Vol. XX No. 3 June 1934

La Montagne No. 259 Mai 1934

Die Alpen No. 6 Juni 1934

Club Alpino Italiano No. 5 Maggio 1934

Unione Ligurel'Escursionisti No. 5 Maggio 1934

Butletti Del Centre Excursionista De Catalunya Any XLIV Num. 468 Maig 1934

Planinski Vestnik Leto 1934 Stev. 6 Svenska Turistforeningens Tiding Nr. 5 Juni 1934

1934

耶馬溪彦山地方の天然林並びに二三の注意すべき木本植物

以上 竹 内 亮氏

山の心理 以上 吉 村 毅氏

黒田清輝畫集 櫻島六圖

日本交通分縣地圖 四十六枚

各地探勝及登山案内 十一冊

三浦大觀 明治四十一年版

リユツクサツク創刊號 第二號 秩父號 以上 木 村 鎮 吉氏

新刊紹介

リユツクサツク 7

早大山岳部年報

六月十五日發行 四一五頁

定價 二圓三十錢

過去三ヶ年間穂高岳麓谷の登攀にその主力を集中し、積雪期五回に及ぶ執拗なる攻撃を試みた早大山岳部は、遂に自らの手によつて之を完登し、不朽の記録を止めた。

この麓谷の報告研究を中心に、昭和三年追悼號の後を受けて、茲にリユツクサツク第七號が新装の薫も高く多年に渉る記録の集積と共に、堂々四百餘頁の大冊として再び刊行せられた。本誌は「麓谷」神の田圃及び「遠ひ出」の三編よりなつてゐるが次に麓谷に關する内容を示せば、

第一次槍平生活追憶 出牛陽太郎 北穂高岳飛躍側 小川 猛男

第二次槍平生活 (三二・一二一) 小川 猛男

第三尾根 (試登) 小川 猛男

第二尾根 今井友之助

第三尾根 小川 猛男

槍平日記抄

第三次槍平生活 (三三・三一四)

第三次槍平小舎生活 出牛陽太郎

第二尾根 (主稜 北山稜) 池野 元章

第三尾根 石澤 五男

第四尾根 (試登) 田村 正男

第五尾根 小川 猛男

今井友之助

北穂高岳北壁 折井 健一 大切戸より縦走路を経て 頂へ 池野 元章

槍平日記抄

麓谷の雪崩に就いて 小川 猛男

追補 第四尾根 (第四次・第五次 槍平生活) 赤松 連雄

次に早大山岳部は一九三一年十一月多年宿望のヒユツテを白馬山麓神ノ田圃に建設した。その當然の結果として「建設経過報告」から其後の動靜のために本誌は多數の頁を割いてゐる。おそらくヒユツテ建設の爲には少なからぬ勞苦が忍れたこと、想像するに難くないが、この大なる犠牲に代へて来るべき飛躍發展の爲に築れた「我等のヒユツテ」こそ光輝ある早大山岳部の將來に意義深き使命を負ふものである。

「遠ひ出」は今亡き石田三郎、須田信太郎、加藤才介、高橋弘二郎の四君の爲に編んだもの。

最後の年報は何分にも一九二八年以來の集成であるから二百頁に垂んとする大量で編者の苦勞も一通でなかつた事と思ふ。

本誌を綴りて嬉しく感じたのは全編にたいよう意氣であり、特に麓谷の編に於て見出される強烈な同志であつた。山の無駄書の多い昨今自分

は久し振りで感激の幾夜かを持つことが出来た。

向書中に挿入せられた寫眞は何れも素晴らしい。特に「麓谷ドーム」「第二尾根P₃」「ハツ峯第七峯」など

若き登山者の心を捉へて止まぬものがある。(逸見)

立教大學山岳部々報 6

昭和九年六月發行 頒價八〇錢

新らしき山岳美論への途(部長辻莊一)春の嶺岳とその附近(奥平昌英・山縣一雄・湯澤巖)冬の北岳東面登攀(山縣一雄)新高山塊、能高越え、大朝尖山(中島雷二)

以上が部報六號の本文で五八頁より成り、他に一九三三年四月以降一ヶ年間の記録が三十四頁ある。

立教の山岳部が昭和四年に部報第一號を發行して以來、毎年缺號なしに部報を一冊づゝまとめてゐる事は大いに敬服に値する。四年とか、五年目にボツリと出す部報よりは、その内容が少量であつてもいい、年毎に新しい報告を知る事はよろこばしい事である。

6號の本文中、「春の嶺岳とその附近」は部員の大多數がパンバ島に集り別山乗越の小屋とブナクラ乗越及び大窓乗越の二ヶ所に張つたキャンブを足溜りとして、互に連絡を取りつゝ、盛んに歩いたものゝ總括的な報告であつて、興味深きものがある

冬の南アルプスは北岳のみしか本文に現れてゐないが、冬の鋸や聖澤湖行等も記録で簡単に片づけられない。詳しい報告が欲しかつた。臺灣行も同部としては大きな遠征であつた事と思はれる。寫眞は餘り美しいものが見られず往年を顧みて淋しい。寫

眞六葉、地圖三枚 (T)

三高山岳部報告 第十一號

七月一日發行 一二四頁

内 容 エネルギッシュなれ 細野重雄

一九三三年度南千島遠征概括 依 一郎

チャチャマブリ 後藤空三

ルル牛岳 内藤況三

アトサマブリ 吉井良三

單冠山及び散布山 郡場正之

南千島の自然景觀に就て 吉井良三

朝日越え 杉山佐一

雜錄(一九三三・四一九三三・四三) 三高山岳部報告は久しく部内雜誌として謄寫刷を續けられてゐたが、今回はまた五號、六號の如く活字で出版された。その爲に幾分オフインヤル的にはなつたが、勿論對内的な方面が全く閑却された理ではない。

本號は目次の示す如く昨夏の南千島遠征報告が主なるもの。一昨夏北千島に遠征を試みた三高が續いて南千島に遠征隊を送り出したことは何よりである。特に少年時代より千島には格別の憧憬を持ち乍ら未だその機を得ない私は、海を越えて、平原の彼方に聳ゆる處地をもとめ行、青年の姿を偲び、美しくさへ感じられた。しかもこの小さき遠征がやがて来るべき大なるエキスパディションの刺戟や動機となるならば更に意義深きものとならう。(逸見)

編輯後記

福島兄の御都合にて本號は編輯半ばで私が残務一切を譲り受ました。恰度折悪く私事乍ら止むを得ない事情から手を離されぬ仕事とち合ひまして思はぬ遅延を来し何とも申譯ありません。然しこんなことは度々ありませんから今後はもつと迅速に取運びます。

不慣れな上に、俗事に迷れながら發行を急ぎました本號は不備な點も外く重ねて御詫び致します。

次號よりの會報もしばらく小生が代る豫定です。敏腕の聞え高かりし福島兄の後を非才の私が引繼ぐのですから、會員各位一層の御支援と御叱正を願ふ次第です。

稀に見る不順な天候に見舞れた今年の夏山もどうやら落ちついた様です。これから愈々良き山の旅、良き

山の記録などが續々と持歸られる事です。各位の山の御便りを御待ちしてゐます。

最後に公務御多忙の中をよく編輯に努力せられました福島兄に對し會員諸氏と共に心からの謝意を表し度く、更に今後の御指導を乞ふ次第であります。

昭和九年七月廿七日印刷
昭和九年七月三十日發行

發行 者 額 田 敏

編輯兼印刷人 逸見眞雄

發行所 日本山岳會

電話・芝・一六四九番

廣店 手取坂 通 恒 社

電話・谷・五六一番

(多木印刷所印刷)

蚊軍の襲撃

山ではこいつが難物

痒さに、夜明けまでまんじりとも出来ぬことさへある。翌日の行程に差支へるのには勿論のことだが、御所持のサロメチールが、蚊軍襲撃に役立つことを御承知下さい。顔や手足へ塗つて寝れば、虫類は匂ひを嫌つて寄りつかず、樂々と安眠出来ます。又、さふれた場合の痒味どめや毒消しとしても好適です。



紙背に起る鬱氣・架藏すべきアルペンストック……

Club Alpin Français

MANUEL
D'ALPINISME

Publié Avec La Colliaboration
du Groupe de Haute Montagne

Tome I Partie Scientifique

Tome II Partie Technique

2 vols ¥ 9.90 丁 30

フランス山岳會員の共同研究になる岳人必携書である。山岳の地質學、氣象、動植物等より山岳寫眞に到るまで山の科學を前編に收載し、後編には岩登り、氷河登攀、冬期登高山の衛生等々實際的方面の技術を説明してゐる。岳人の座右に缺くを許されぬものである。

SCRAMBLES IN
JAPAN &
FORMOSA

By

W. H. Murray Walton

¥ 15.00 丁 50

ウエストン以來、外人の手になつた唯一の日本山岳文獻、臺灣の處女峰征服の記録をはじめ南北アルプス、東北の山々等著者の足跡は廣いが、未曾御嶽其他の信仰的登山地に對しては外人にのみ感じ得る詩情を展開してゐる。

東京・日本橋・通二

丸善株式會社

AN ALPINE
ODYSSEY

By F. S. Smythe

近 着 16/-

カメット及カンチエンジュンガの登行記に依つて一躍著名となつた著者の近著である。本年三月から五月にかけてのシルグレットからモンブランに到る記録であるが、ヤングのオン・ハイ・ヒル以來名ガイドとして折紙づけられた Joseph Knubel の傳記や、アルプス登行の回想及郷土譚が豊富に收載された銷夏の好讀物である。

Abraham, G. D.-Modern Mountaineering
First Over Everest: The Houston-Mount

¥ 6.30 丁 13

Everest Ex edition 1933

¥ 10.50 丁 30

Hall, R. W.-The Art of Mountain Tramping

¥ 6.35 丁 22

Kirkpatrick.-Alpine Days and Night

¥ 6.00 丁 14

Klucker, C.-Adventures on An Alpine Guide

¥ 8.80 丁 2

Palmer, W. T.-The Complete Hill Walker

¥ 6.30 丁 22

Rockclimber and Cave Explorer